

---

# 氷柱～つらら～

作並 比奈乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷柱くつららく

### 【Nコード】

N2560B

### 【作者名】

作並 比奈乃

### 【あらすじ】

普通の家族の生活はどんなだろう。私を愛してくれているのは誰なんだろう。奈々の幼少時代から大人になるまでをたどっていきま

す

## 第1話 お利口さんな子供の頃

「奈々ちゃんはおとなしいのねえ」

「この子は鉛筆と帳面さえ預けておけばお利口さんにやってるんですよ」

来客が来ると必ずこういうやりとりが聞かれた。私は3歳くらいだった。まだはつきり意味は分かってないものの、祖母の

「お利口さん」

と言った時のクシャリと変わる笑顔と、声が高鳴るのが心地よいというか幼いながらに、

「イイコトナンド」と理解したので、私はなるだけノートに鉛筆で桃やら人やら書いておとなしくお利口さんに過ごしていた。

私には両親が揃っていた。父はとても優しい人だ。幼い頃の記憶は忘れてしまう人が多いようだが、私ははつきり覚えている。2歳頃に、父は私を膝にのせ微笑んで抱き締めてくれる…。今でも思い出すと胸が熱くなる。

母はさっぱりした人だが甘えさせてくれる人だ。ときどき夜中に幼い私を置いてどこかに出掛けていた。私は真つ暗い中テレビのニュース画面にむかって大声で泣いていた。…これも覚えていたようだ。対照的な2人だが、血のつながった両親は大好きだ。

「奈々」

と言う名前も二人がつけてくれた。柔らかい包むような声で

「なな…」

と呼ばれていた。

「%\$#&amp;…%!!」

「…」

「奈々！起きろ！…何度言ったら分かるんだ！」

「ハイ」

布団を剥がされ、寒い雪下ろしの風にさらされる。冬だというのに窓は全開。しかし逆らうことはできず、黙って起きる奈々。

「起きて顔洗って、それから玄関前を掃いてこい」

…これが5歳児に言う言葉なんだろうか。他の5歳児は知らないがきつと私だけこんな目にあっているんだろう、そう思っていた。

義父は厳しい人だ。日曜日ですらこんな風に早起きを無理矢理強いられ、しかもほづきなんて小さな両手でうまく持てないにも関わらず、綺麗に清掃することを求める。そればかりではない。家には長い木目調の美しいテーブルがある。なにげなしに眺めていると、

「ほら、ぼけつとみてるもんじゃない。ほこりがあるだろう。布巾絞ってきてふけ」

私は、この家にお手伝いとして住んでいるのか。こんなことを言うのは

「血ガツナガツテイナイ」

からなのか？ この家に来たのは3歳頃だ。ここの祖母が私をたいそう歓迎し可愛がってくれた。母に似ていないからだ。母にはどこかよそよそしい優しさで接していた。 来る日も来る日も

帳面に綺麗な絵を描いて過ごしていた。 お菓子はもともと好き

じゃないように食べずに、

「ドウゾタベテクダサイ」

とお客さまに渡し、ジュースはこぼさずきちきち飲む。お絵描きで出た消しかすは小さくまとめてティッシュのうえに置いておく。

「なんてお利口さんなんだろう」

自分にそう言い聞かせ自分を励ましていた。 奈々は小学生にな

った。前から二番目だった低い身長は4年生になると後ろから2番目くらいに成長していた。

「ただ今帰りました…」

語尾下がりのやる気ない声で帰ると、祖母が

「おかえり」

と笑顔で迎え、ごった煮のおかずを出す。よそっているうち、義父と母が帰ってきた。母は義父の大工の仕事を手伝っていた。

「奈々帰ってたの。疲れたわあ」

玄関から一段上がった所にふにやりと座り込んだ。漂うおがくずの匂いとぼさぼさの母の髪を見て、おもわずため息をつく。

「なんで血の繋がった父さんと別れちゃったの」

…言えずただ見つめるしかない。

「なあに、そんな悲しい顔して。ほらほらゴハンの支度しよっか」

母は美人だ。お世辞ではなく。では奈々はというと…まあ、そこそこ普通。

…きれいな母のやる仕事じゃない。なんであんな人と結婚してしまっただらう。

支度が整った。しばらくするとザクザクと歩いてくる嫌な雰囲気。

義父が歩いてくると見えなくても分かる。今までの穏やかな気持ちが緊張へと変わっていく。

## 第2話 母との外出（前書き）

義父と住みだしてからもう4年生になっていた。体やココロの変化がすすんでいくなか ある日母が奈々を外出へと誘うが、いつもと感じが違う

## 第2話 母との外出

「なんだ、奈々！ そんなところにつつまってないでさっさと飯だ」

………こんな日々が 私は当たり前。

でも、他の子達は違うつてわかる。だって、友達の家遊びに行くとき、こんなんじゃないもの。怒るときは悪いことをしたときだけ。それ以外は優しく見守っているみたい。

私もそんなふうにされたい でも叶うはずは、ないのかな。  
「血ガツナガツテナイカラ」

私はもう4年生。微妙にまだコドモなんだけど。

男子がコドモに見えて仕方ない。…1年生からメンバーは変わらない小さな学校。大好きな男の子と同じクラスはうれしかったけど、だんだん幻滅していくのもさみしかった。

女の子同士で話題になるのが、アイドル話もおしゃれもそうだけど、体とココロの変化。

恋の話も盛んになっていたし、前よりももっとナーバスなキモチとか複雑なココロ模様が増えていく。

ある子は胸が大きくなって、ある子は生理がきたと話していた。

私は実はまだきていなかった。体はやせて胸もないし、発育が遅いみたいだ。

…もし生理が来たら、義父には絶対ばれたくないし、胸が大きくなってブラをするようになったら干す場所も考えなくちゃ。

もやもやとしたいやなキモチがうざりたい。。

ある日曜日、母が、

「2人ででかけよっか」

と、こそこそと私に行った。

とゆうか、義父はどこかに行つて既にいないし、祖母ぐらいだった、家にいるのは。普通に買い物に行くにも2人で行つてるし、何をこそこそしなきゃならないんだろう………

「お義母さん、ちょっと実家から電話が来まして、母の手伝いを頼まれましたので行つてきますね。少しいつもより帰りがゆっくりになりますが、夕ご飯前には戻りますから」

…そんな電話いつきたんだろう??

「…あら、たまにはゆっくりしてきたら良いじゃない」

祖母の声は優しくかったが、蜜柑を含みながらテレビを見たまんま、顔をこつちには向けずに言った。

「…さ、行こうか」

なんのおかまいなしに明るく母が行った。

母の運転する車で賑やかな街方面に車を走らせていた。

ゆらゆらゆられながら

「いつ電話きたの、おばあちゃんから」

「…うーん、奈々ちゃんとお掛けたいから嘘いっちゃったかな」  
なんか変だ。いつも買い物で出掛けるのに。

母はなんか怪しいとなんとなく変になる。。キモチと言ってること  
とが違つてゆうか……

「いつも出掛けるし、別に嘘つかなくても……」 「そうね

え。ふふふ。女同士の話し合いがあるからかなあ」

「何それ？」

「まあ、まずは美味しいものでもたべようね」

そう言つとあまり話さなくなった。

私と母は、映画館から食品や服やら色々あるショッピングモールの

カフェでケーキとパフェを食べて、それから私のスカートを買  
い車に乗った。

なんだ、いつもとかわんない。何があっただろう。  
それから車は家とは逆の少し街の外れにある自然公園のほうに向か  
っていた。

どうしたの、と聞こうと思ったけど、なんかいけないような気がし  
てきて話し掛けなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2560b/>

---

氷柱～つらら～

2011年1月20日02時58分発行